

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 71. 2025. 9

\*\*\*\*\*

北海道大学総合博物館ボランティアの会 2025 年度（第 23 回）総会報告	-----	在田 一則	1
「ほっとニュース北海道」で首藤光太郎先生が熱い思いを伝えました	-----	星野 フサ	2
講演「開拓使最初の屯田兵村 零似」に学ぶ	-----	久末 進一	3
植物標本と私	-----	佐藤 謙	4
バイオメティクス市民セミナー「『蟲』の新世界」を開催しました	-----	大原 昌宏	6
ポプラチェンバロ&バロックアンサンブル「大バッハと息子たち」	-----	永岡 明美	7
「零似屯田兵村兵屋跡を訪ねる」に参加して	-----	菊地 敦司	8

## 総 会 報 告

### 北海道大学総合博物館ボランティアの会 2025 年度（第 23 回） 総会報告

ボランティアの会 会長 在田一則

北大総合博物館ボランティアの会第 23 回総会および講演会が 2025 年 5 月 30 日（金）午後に総合博物館 1 階「知の交流コーナー」で開催されました。以下に報告いたします。

#### 総会（13:30～14:00）

総会は 12 名が参加して、星野さんの司会のもとで行われました。会長挨拶の後、以下の 2024 年度活動報告および 2025 年度活動計画の提案があり、承認されました。

#### 1. 2024 年度（2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日）活動報告

##### (1) 総会と講演会の開催

第 22 回総会を 2024 年 5 月 31 日（金）に開催した。例年総会後には講演会を行なっていたが昨年は講演会に代えて総合博物館 1 階北階段付近の大型ディスプレイで常時上映されている、教員・研究員による総合博物館の「すごい標本」およびバックヤード紹介のビデオ 12 編

（各 2 分～5 分）を鑑賞した。皆さんそれぞれに蘊蓄を語り、面白い内容であるが、私たちボランティアは落ち着いてみたことがないので、好評であった。

##### (2) ボランティア談話会の実施

2024 年度は実施しなかった。

##### (3) 博物館に押しかけよう会の実施

2024 年 11 月 30 日（土）第 30 回（札幌市博物館活動センター、8 名参加、田中嘉寛学芸員に詳しく案内していただいた。

##### (4) ボランティアニュースの発行

2024 年 4 月 ボランティア ニュース第 68 号（8 ページ）

2024 年 9 月 ボランティア ニュース第 69 号（8 ページ）

2025 年 1 月 ボランティア ニュース第 70 号（6 ページ）

毎号 700 部～800 部を発行し、北大正門のインフォメーションセンター「エルムの森」のほか、東京の北大オフィスにも送っている。

(5) ボランティア会ニュース編集委員会：星野フサ（委員長）今井久益・久末進一・山岸博子。編集委員会を適時開催した。編集委員の皆さんの努力により、年 4 回（3 月、6 月、9 月、12 月）の定期発行ではないが、3 回発行した。

(6) ボランティアグループ連絡会

1～2か月に1回の割合で火曜日あるいは金曜日の午後1時30分からS224で開催した。

- (7) 各グループの状況 (2025年5月20日現在のボランティア登録者数は15グループ、240名)、植物・菌類 (37名)、昆虫 (23名)、考古学 (37名)、メディア (2名)、化石 (28名)、北大の歴史 (5名)、展示解説 (16名)、遠友夜学校 (9名)、4Dシアター (15名)、チェンバロ (11名)、図書室業務 (12名)、第2農場 (13名)、ハンズオン (7名)、きたみてガーデン (8名)、地学 (17名)

2. 2025年度の活動予定 (2025年4月1日～2026年3月31日)

各指導教員のもとでグループ活動に協力すると

ともにボランティアどうしの交流をさらに深める。

(1) 全体の活動

勉強会 (ボランティア談話会・博物館へ押しかけよう会など)・懇親会を適時開催する。

(2) ボランティア ニュースの発行

年4回の定期発行に戻す努力をする。各グループの活動の報告記事。

(3) 2024年度グループ連絡会

在田・星野・新妻・外山・石田・山岸

講演会 (14:00～15:45)

講師: 永峰 貴さん (琴似屯田子孫会事務局長)

演題: 開拓使最初の屯田兵村 琴似

(本誌8ページの菊地敦司著「琴似屯田兵村兵屋跡を訪ねて」をご覧ください)

## 活 動 報 告

### 「ほっと ニュース北海道」で首藤光太郎先生が熱い思いを伝えました

植物ボランティア 星野 フサ

2025年7月28日午後6時からNHK総合で放送された「ほっとニュース北海道」の番組「若き植物学者の思い」では、植物ボランティアを指導されている首藤光太郎先生の情熱が伝えられました。当日見られなかった方のために、内容を簡単にご紹介します。

番組では、北海道帝国大学初代総長である佐藤昌介が1876年に採取したエゾゴマナノ標本が、北大総合博物館に収蔵されていることが紹介されました。

さらに、首藤先生は「身の回りにいるさまざまな生き物と人間がどのように関わるかが大切」と述べ、北海道大学構内の豊かな自然環境について、子どもたちに熱心に伝える姿が映し出されました。その姿は、温かい感動を与えてくれました。

およそ50年ぶりに発見されたタカネハナワラ

ビの映像も紹介されました。

また、植物ボランティアとして活動する吉中弘介さんが、「縁の下の手持ちとして、乾燥標本がきちんと整備されて保管されることが重要です」とボランティアとしての基本姿勢を語っていたのが印象的でした。



植物ボランティア室で作業中の左から本多丘人さん、吉中弘介さん、田端邦子さん、児玉 諭さん

## 講演「開拓使最初の屯田兵村 琴似」に学ぶ

室蘭市文化財審議会会長・図書ボランティア 久末進一

表題の講演会が本年度総会（5月30日総合博物館知の交流ホール）で開催され、「琴似屯田子孫会」の永峰貴事務局長が、自らが琴似屯田兵の血脈を継ぐ三代目として、郷土の礎になった先人たちの開拓の苦闘と栄光の歴史を語った。（以下、要約）

屯田兵制度というのは開拓使の黒田清隆次官が明治6年建議。北海道の未開拓地開墾、ロシア侵略に備える北方防衛、朝敵となった東北諸藩の旧士族救済という、内外の難問解決策だった。官給品と家屋、土地付きの兵士募集という殖民政策だが、戊辰戦争やのちの西南戦争、士族の反乱など反政府勢力の隔離封じ込め対策にもなったという。

琴似屯田兵村は明治8（1875）年に第1号として配置され、以来、本年で150年の節目を迎える。

琴似地区が選ばれたのは札幌本府防衛上の地の利からで、安政4（1857）年以來の「在住」幕臣による開墾地など再利用もできた。この地に、松前、会津、仙台、庄内など旧藩士族、平民ら198戸、男女965人が応募、集結して最初の兵村が誕生した。入植資格と条件は明治8～15年は年齢18～35歳で独身者可。給与地5千坪支給。これが明治16～21年には17～30歳で家族同伴。1万坪支給。さらに明治22～28年には17～25歳で士族も平民も同じ扱いに変更、1万5千坪支給となる。給金の代わりに開墾地を与えるから自活せよ、というものだった。

密居型の兵屋が建て混む兵村と、支給地は離れており、兵員の集団行動や集合訓練に適しても、耕作に向かうには遠く不便だった。常に国防戦略上の配置が開拓より優先しており、こうした兵村は制度廃止の明治37（1904）年までに札幌はじめ道内に37兵村が配置された。これが北海道第7師団になる。

屯田兵は開拓農民であると同時に憲兵扱いの准陸軍武官でもあり、軍隊ラッパの合図で起床4時、就業11時間。軍人として練兵場での基本訓練、軍事演習を受け、農地開墾作業も義務付けられてい

た。熊、狼から耕作地を守り、開墾が子孫に残す土地を生む新天地の夢を胸に、ひたすら過酷な重労働に耐える日々であり、それを支えたのは士族出身の士魂であった。

大熊忠之助の間取図スケッチから、彼らの暮らす官給兵屋の様子がわかる。土間に板の間と囲炉裏。4畳半に6畳座敷。寒冷地配慮は無いから冬は寒かっただろう。1戸区画150坪内に建つ粗末な平屋構造の兵屋で、30年の兵農生活が続けられ、明治37（1904）年3月、兵村は「琴似村」となった。

永峰氏はじめ子孫の多くが今も居住する琴似地区には、屯田兵がつちかった共同体の絆と地縁が今も誇り高く息づいている。地域につながる愛郷心が、その地を故郷に変え、根を張って生きる力になることを学んだ。



講演中の永峰 貴さん

最初の屯田兵村である琴似は、最初であるが故に、そのすべてが試行錯誤であり、加えて、逆賊という冷たい世間の目がありました。その冷たい世間の目の中で生きていくには、ただひたすらに働くことであったに違いありません。そうして今の琴似ができたのです。それから150年。老朽のため非公開となっている琴似神社境内の屯田兵屋の改修を、記念事業の一つとしましたが、3千万円という膨大な経費が必要とのこと。どうか、お力添えをいただきたく…。（永峰記）

## 植物標本と私

植物ボランティア 佐藤 謙

2017年春の北海学園大学定年退職時、長年かけて収集した植物標本（台紙貼り付け・ラベル付き、段ボール約300個）を北海道大学総合博物館に寄贈した。その後、2025年春まで同博物館資料部研究員としてそれらの整理を進めるとともに、植物相（フロラ）が十分解明されていない山岳を対象に、新たな植物採取を続けた。

以上の植物標本の中に、数枚、小学5年生の夏休み宿題とした、実家（岩手）の庭に生える園芸植物や人里植物の「押し花標本」が含まれていたと思う。押し花を画用紙にセロテープで留め、ラベルは手書きのものである。これらの標本は、今後、北大標本庫に正式に収納できるか判断するが、こうした子供の頃の押し花作りは、多くの方の体験にあると思う。

私が植物学専攻を考えた契機は、岩手の高校において植物好きの生物学の先生と出会い、野山を幾度もご一緒したことにある。葉が切れ込んだエイザンスミレ、清楚な青い花を付けたキクザキイチリンソウ、上品でありながら妖艶でもあるオキナグサ、スギ林の林床に咲いていたショウジョウバカマ、田んぼの畔に生えていたセンボンヤリ、茎から黄色い液が出る大型草本のタケニグサ、低木のキブシの花などが今も印象に残る。

上記のうち北海道と共通する植物種については、次のことが特記される。北海道のキクザキイチリンソウは札幌近郊をはじめとして白い花が多く、青い花は道南で白い花と混生する例を見てきた。この植物の花の色は、地理的にどのように変化しているのだろうか。北海道のショウジョウバカマは、低標高地では湿原に見られるが、主に高標高地の亜高山帯から高山帯にかけて雪田や雪崩地に多い。また北海道のセンボンヤリは崖地・岩礫地に多く見られる。これらは、高校時代に知ったそれぞれの生育地とは明らかに異なり、何故なのか、あるいはそれぞれ遺伝子が異なる個体群を形成しているのか、など様々な疑問と興味がわいてくる。

高校2年には、友人3名と北上市から夏油温泉まで長い登り坂を自転車移動、夏油温泉から牛形山（標高1,339m）に登った経験がある。このとき、移動と登山だけで精一杯、残念ながら、綺麗なブナ林とキヌガサソウの花以外は、あまり記憶に残っていない。

高校時代、自宅で押し花を作成していたところ、厚く重ねた新聞紙を猫がひっかき回した事件がある。一枚だけ挟んでいたマタタビを猫が敏感に関知し引っ張り出したのである。このとき、爺さんから「猫にマタタビ」という格言を教わった。爺さんはまた、植物採取を続ける私に「博物学者」になるのかと尋ねてきたが、この言葉は、学校で習わない新鮮なものであったので、長く記憶に残った。また、北上山地の山奥にある小学校に勤務していた母は、葉面の中央に直接花を付けたハナイカダを持ち帰ったことがある。このように植物を覚えようとする私に対して周囲から静かな応援があり、将来の方向を定める助力となった。

ただ、60年以上前の高校時代に採取した植物標本は、岩手の高校に置いてきたので、いま残されているかどうかは定かでない。

さて、北大1年生、暑寒別岳と羊蹄山の植物観察に出かけたが、ほとんど分からない植物ばかりであった。2年生秋から修士課程まで農学部在籍、伊藤浩司先生から多くを教わった。何度もフィールドを共にし、「何度言ったら分かるんだ」「何度聞いても分からない」との応答がたびたびあった。現場では先生が呆れるほど植物名を繰り返し聞き、研究室に戻ってからは、実体顕微鏡で採取標本の同定作業を続けた。

3年生から始めた卒業論文は、札幌近郊4山岳（余市岳・無意根山・空沼岳・定山溪天狗岳）の植物相研究であった。4山岳において最初だけ先生が同行、その後、4山岳に数回ずつ登り植物採取を続けた。4年生には別に夕張山系嵯山（キリギン山）の植物相



調査があった。修士課程2年間は大雪山の高山植をテーマとしたが、利尻岳や知床半島羅臼岳の高山植生も調査した。以上の4年間で多数の植物標本を採取し同定を続けた結果、かなり多くの植物を覚えることができた。

1973年から2017年春(24歳から68歳)まで北海学園大学に勤務、道内高山すべてを踏査することを目標とし、とにかく歩き回った。個人研究のほか、以下の公的委託調査があった。北海道の自然保護担当部局による大雪山系(1973-1975)、日高山系(1976-1978)、知床半島(1979-1980)、夕張山系(1983)ならびに暑寒別岳天売・焼尻(1984)、環境省による遠音別岳原生自然環境保全地域(1984)と大平山自然環境保全地域(1986)、前田一步園財団による阿寒山系(1989-1990)、道教委による夕張岳における国天然記念物指定前調査(1991)などである。

道外・海外でも植物標本を採取した。1971年の京都大学における生態学会は大会後の現地見学会を伊勢神宮の内宮・外宮とした。伊藤浩司先生と参加した私は、例外的に植物採取が許可されているとして、植物採取が命じられた。スギとヤブツバキ以外まったく知らない照葉樹林の植物を採取し、その旅の終わり頃、国鉄奈良駅で生乾きの標本にアルコールを吹き掛け段ボール1箱に詰めて、チッキで札幌に送付した覚えがある。

1995年には、国立科学博物館の門田裕一さんのお誘いによって、シベリア・ノボシビルスクから天山山脈(カザフスタン・キルギスタン・ウズベキスタン)の1か月におよぶ海外学術調査に参加した。また、1999年には、朝日新聞社主催の国後島調査に、山の師匠である鮫島惇一郎さんのお誘いによって参加した。さらに、横浜国立大学の藤原一絵さんと東京農業大学の中村幸人さんのお誘いにより、サハリンなどロシア調査に参加した。以上の道外・海外で採取した植物標本もかなりある。

氷期の生き残り(遺存種)として隔離分布を示す北海道の希少植物について、道外・海外の生育地との相違があると大いに興味がわいてきた。フサスギナやイチゲイチャクソウは、ヨーロッパでもカナディアンロッキーでも、亜高山帯・亜寒帯針葉樹林の構成種であった。これらは、氷期の北海道に渡ってきた当初、北海道に広分布していたが、後氷期にそれぞれ分

布域を縮小させ、生育地が局限・点在するようになったと思われる。北海道で崖地に多いセンボンヤリは、シベリア南部・モンゴルとの国境付近において、ステップで見たことがある。この種は、寒冷乾燥の時代に北海道に渡来し、局所的な乾燥環境下にある崖地に生き残ったと推測される。

ところで、主に北海道、そして道外・海外の山岳域から収集してきた私の植物標本には、長年にわたるため、時代の変化が反映されている。

台紙に貼り付けるテープは、1980年代までは学生時代と同様、丈夫なタイプライター用紙にアラビアゴムを二度塗り、乾燥後に細い带状に切って作成し、水で濡らして貼り付け使用した。1990年代からは、現在と同様のラミネートテープと電熱ゴテを使用するようになった。

ラベルには採取場所・採取年月日・採取者を記入している。ただし、私の標本ラベルには、近年でもGPS情報を記していない。私は、希少植物については存続を第一の目的とし、詳細な位置情報は慎重に管理すべきと考えている。そのため、公開する植物標本のラベルとは別に、希少植物の位置情報を非公開の記録としてまとめている。

私の植物標本が、植物分類学の基礎資料として、また希少植物の存続・生物多様性保全という応用面において、ともに大いに活用されることを切に願っている。



高校時代に覚え、半世紀ぶりに再会した  
オキナグサ(2015年3月、宮崎県都井岬)

## バイオミメティクス市民セミナー「『蟲』の新世界」を開催しました

特任教授 大原昌宏

2025 年 8 月 6 日（水）に久しぶりのバイオミメティクス市民セミナーとして、「『蟲』の新世界」を開催しました。

講演は以下の 2 題で、そのあとフロアーの参加者も含めた対話式ディスカッションが針山孝彦先生（浜松医科大学）の司会で行われました。

- ・「蟲の新世界—アリとのぞく、みんなの未来—」  
穂積 篤（バイオミメティクス推進協議会）
- ・「北海道の身近な昆虫について」大原昌宏（北海道大学総合博物館）
- ・会場との対話と課題抽出 「蟲瞰学」：科学は自然をどのように捉えるべきか 司会：針山孝彦

「蟲」という漢字は、昆虫だけではなく、様々な小さな生き物全般を指す言葉で、現在の昆虫で使われる「虫」はマムシなどの蛇が鎌首を挙げている形の文字になります。「蟲」はまさに生物多様性をよく表している漢字であり、地球環境の劣化と生物多様性の減少を憂う私たちには、再度、認識を新たにすべき象徴的な漢字です。

さて後半のディスカッションでは、「環世界」が話題となりました。人間中心（ヒューマンセントリック）の生活を続けてきた現代は、温暖化や環境悪化など、人間にとっても住みにくい地球環境になりつつあります。ヒトという生物の目で見ている世界観では、地球上の様々な問題を解決しようと思ってもすでに限界があるように思えます。環世界とは、その生物が見ている世界、感じている世界のことであり、犬であれば、匂いによって世界（環境）が作られていることでしょう。では、蟲はどうでしょう。蟲の目線で地球環境を見直すと、新たな環境保全や改善の方向性が見えてくるのではないのでしょうか。

「蟲の新世界」（2025：バイオミメティクス推進協議会出版）という絵本が出版されました。

これは幼児から大人まで、わかりやすく昆虫（今回はアリの目線）の環世界を紹介する絵本です。

セミナー後は、多くの方にミュージアムショップで絵本「蟲の新世界」を購入していただき、著者・関係者はサインをして感謝の意を示していました。参加者は 45 人でした。



講演後、意見交換をする、左から針山孝彦（浜松医科大学）、太田理一郎（ロレアル）、大原昌宏（北大総合博物館）、穂積 篤（産総研）、下村政嗣（千歳科学技術大学）の皆さん



## ポプラチェンバロ&amp;バロックアンサンブル「バッハと息子たち」

チェンバロ ボランティア 永岡明美

バッハ。その父と息子たちが残した作品をバロックヴァイオリン、ヴィオラ、リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、そしてポプラチェンバロで奏でる音色が聴衆を穏やかなひとときに誘います。

最初は、今回初演奏の工学部2年生の加藤君。ポプラチェンバロが作製された頃は1歳！そんな年上のポプラチェンバロは初々しい若者の演奏を応援するかのようによい音色を響かせます。

父である大バッハは子供が20人ほどいました。が時は1700年代。幼少期に半数が亡くなりました。それでも生き残った息子たちが作曲家や演奏家として活躍。それぞれに個性ある息子たちは今の時代までたくさんの音楽家に影響を与え続けています。

「バロック」は「クラシック」と何が違う？例えばヴァイオリン。バロックヴァイオリンを演奏する池上さんの解説によると、バロックヴァイオリンには金属が使われていません。普通のヴァイオリンの弦は金属。それがバロックヴァイオリンの弦は羊の腸。音色が金属の弦よりも柔らかく室内演奏にぴったり。

バッハが活躍した時代は室内楽、それも宮廷で演奏、パトロンがついて自分好みの曲を作曲、演奏させる贅沢な時代でした。その中でも低音が好きなパトロンのために作った曲が演奏されました。

確かに何だか低い、ずっと低音、低い。普通、曲の盛り上がりには高い大きな音が演奏されることが多いイメージですが、そこまで低音で？そんな曲も解説を聞いてから演奏を聴くと何倍も楽しめます。リコーダーはもちろんバスリコーダー。

バロック用のリコーダー、バスリコーダーはアルトリコーダーの倍ほどの長さ、そして長いので普通の人があるままでは吹けないので吹き口に管を付けて吹けるようになっています。そんな大きなリコーダーなのに音が小さい！大きな音が出ない！いろいろなリコーダーを演奏できる田崎さんが今回はそのバスリコーダーで演奏。貴重な音を

聴くことができました。

チェロの先祖と言われるヴィオラ・ダ・ガンバも低音が得意です。大きな音は出ません。チェロとは似ていますが、チェロのように脚はついていませんから人間の脚、膝で支えます。ただ、楽器そのものに滑り止めはありませんから上手に態勢を整えないと滑る！演奏した松田さんによると、着ているもので演奏しやすさが違ってくるそうです。

クラシックも良いですが、大きな音が出せないバロックの楽器が集合して穏やかな音色を奏で、とても心穏やかになれる時間です。

今回は開演1時間前の整理券配布の時点で残念なことにたくさんの方にご入場いただけない事態になりました。皆さん、とても楽しみに来てくださったのに入場いただかず、それでもあきらめきれず数名の方が開演後、ドアの外でかすかに漏れ聞こえる音を聴いてくださっていました。途中、退場なさった方がいらしたので、大急ぎで外にいらした方の中にご案内できました。

これからもコンサートで一人でも多くの方に良い時間を過ごしていただけたらと願っております。



左から

バロックヴァイオリン 池上依さん

チェンバロ 新妻美紀さん、石川弘晃さん(農学院2年)

加藤千加良さん(工学部2年)

リコーダー 田崎菜津子さん、稲川京子さん

ヴィオラ 若松幸絵さん

ヴィオラ・ダ・ガンバ 松田祥子さん

## 「琴似屯田兵村兵屋跡を訪ねる」に参加して

植物ボランティア 菊地敦司

札幌の初夏を告げる札幌まつりが終わり、夏も本番といった時期に差しかった令和7年6月22日に第31回博物館に押しかけよう会「琴似屯田兵村兵屋跡を訪ねる」に参加させてもらった。参加者は9名で案内役は琴似屯田兵子孫会事務局長の永峰貴さん。おじいさんが琴似屯田兵でなんと今も入植した場所にそのままお住まいという。まさか明治時代に札幌と琴似の礎を築いた屯田兵の子孫がそのまま同じ場所にお住まいとは。いやはや、驚きをと通り越して感動すら覚えた。まさに生き字引というべき存在に琴似の屯田兵の足跡を案内して頂けることに期待がふくらんだ。

まずは地下鉄琴似駅から当時の琴似屯田兵村の配置を教えて頂く。なるほど、今の街路とよく重なっており、当時つくられた道路と区画がほぼそのまま残っていることがよくわかる。足を運び次は復元された琴似屯田兵村兵屋跡へ。永峰さんの解説も熱が入りはじめ、兵屋の構造や暮らしの話にこちらも食い入るように聞き入る。特に印象に残ったのは小学生へ初めて屯田兵の解説を行ったときのくだりで、最初はとにかく沢山の話をして伝えようとしたが、後に感想がきたらあまり伝わっておらずがっかりしたそう。小学生からしたら当時の生活は想像できようはずもなく無理もない。そこでいわゆるプッシュ型の授業では難しいと感じた永峰さんは、復元された屯田兵屋に泊る

体験型かつ自己思考型の学習に切り替えた。これは素晴らしいアイデアで感心した、自分も厳冬の屯田兵屋に泊って当時のしんどさを体験してみたいところだ。

場所を琴似神社に移し、琴似屯田兵にまつわるエピソードの数々を聞くと結束がいかに強かったかが伺える。開拓初期の苦難は想像を絶し、士族としてのプライドと郷里を離れ北の地へ行かざるを得なかった現実の葛藤が常にあったことだろう。敷地の一角に保存されている屯田兵屋はほぼ当時の現物だけあって時を経た貫禄があり、柱など建材のスレや床板に生活のあとが刻まれ当時の息遣いを感じる。曳家され現在の場所にあるそうだが、当時保存に尽力された方々には敬意を表したい。残念ながら安全面から現在は非公開であるそうだが、もっと多くの人の目に触れてもらいたい遺構である。

解散して帰路につき、駅前通りを経て琴似屯田兵の余韻を感じながら JR 琴似駅前についたころ、広場に植えてある大きなハルニレの木に目が留まった。屯田兵が入植して開拓を始めた当初は空なお暗いハルニレやヤチダモなどの鬱蒼とした樹林が無限と思えるほど広がっていたであろう。開拓当初の苦労はいかばかりか、などと当時の風景に思いをはせつつ琴似の街を後にした。

## 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 71

- ◆ 編集人：北大総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、久末、山岸、永岡）
- ◆ 発行人：在田一則
- ◆ 発行日：2025年9月
- ◆ 連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel:011-706-2658
- ◆ ボランティア ニュースは、総合博物館のホームページからご覧になれます  
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>